



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第21号



具現の人 松田 淳さんを送ることば

……聴いて欲しいモーツァルト その18

会員番号 K618 加藤 明

《モーツァルト広場》結成後はや13年。

それぞれの人生途上にあって、モーツァルトという人類の文化遺産をこの秋田の地で一曲でも多く愛聴しよう、その至福のときを過ごそう、と活動してきた。

ケッヘル番号を会員番号とひとつに結ぶことで、参画のモチベーションも高まり、現在会員は130名を数えるまでに成長してきた。

主宰者としてはこの上なく喜ばしいことである。

しかし、いま、またしても私たちはモーツァルトをこよなく愛した熱心な会員を喪った。

K540 (アダージョ・ロ短調) 松田淳 (キヨシ) さん、その人を。

松田さんは私にとって、手強い人でした。

いったい、私が手強いと感ずるタイプというのはどんな人なんだろう。

敢えて言えば、他人に接する際に一切の偏見や先入観を排除し (これはそんなに珍しくない)、さらにいつも朗らかに受け容れる態度を絶やさない (これは誰しもができない)、タイプの人ということができる。

さらに私はもうひとつ松田淳という個性に鮮烈な印象を抱いている。

それは彼の他人への思い遣り、面倒見のよさ (これはさらに誰しもができない) と、つくり

ごとに振りまわされる現実にあって、余計なものを極力削ぎ落としたかのような丹精で凜冽さが際立った姿勢 (これはほんとうにマイノリティーと言える)、である。

だから、いつも会ったときに私は清々しくて、人として好ましく感じておりました。

以下は具現の人松田淳さんへのオマージュを少し背伸びして綴ったモノローグです。

己のために、どこか自分を落ち着かせるために、告白的に書いたものです。

◇

◇

『……松田さん、いまどうしていますか？

あなたが忽然と不在を告げてから、はや3ヶ月が過ぎようとしていますよ。

でも、正直あなたが二度と会えなくなったとは、ぼくはからっきし思っていないんだ。

広場の例会やコンサートのたびに屈託ない笑顔で話しかけていらしたあなたが、もう来れなくなったなんて、冗談も過ぎるというものだから。

松田さん、実はぼくはあなたに尋ねたい、とずっと考えていたことがあったんです。

それは、どうしてモーツァルトがあなたを惹きつけたのか、についてあなたの見解というか心情でもいいから訊いてみたかった、ということです。

なにか、あなたのひた向きな生き方にモーツァ

ルトとの共通性みたいなものを感じていたし、その答えのなかにきっとモーツァルトの秘密が隠されているように思えたからなのです。



「ひとつの主題を繰り返しながら曲が流れていき、瞑想の中にいるような感覚をおぼえるのである。悲しみとか激情といった雰囲気はない。一人で階段をゆっくり上りながらその足取りを一步一步確かめているような感触でもある。透明感が高いとも言えるだろう。」

松田さん、憶えていますか？

この文章はあなたが大好きだったK540・アダージョ・ロ短調についてあなた自身が語ったものですよ。(参照、会報第16号「K540・アダージョ・ロ短調の魅力」)

これを読んだとき、よく聴きこみ、こころを尽くして没入した人だけが到達できる表現だなあ、とぼくは率直に唸りました。

今だから言えますが、この時からぼくはすっかりあなたを友達にしまいました。

これほど、枯淡と孤高の一曲にこだわった松田さんであれば、どうしてモーツァルトがあなたを惹きつけたか、について興味を抱くのは当然ではないだろうか。

その質問に対するあなたの答えを聴けないままとなって、どうしても言っておきたいことがあります。

あなたには、W・A・モーツァルトを想起させる人生へのひた向きさがありました。

そんなに照れなくともいい話です。

そのひた向きさや凛冽な姿勢、そしてイメージネーションの豊穡さは今年になってぼくが読み始めた小林秀雄の《本居宣長》のイメージとつながってきたのです。

モーツァルトと本居宣長はともに18世紀の中後期を生きただけでなしに、畑こそ音楽と文学と違いはあるものの、ともに過去の文化遺産を己のここのように掘り起こし新たな創作を世に問い続けたことや、二人が自分の選んだ創作の道に弛まぬ努力と研鑽を重ね、さらにその道をイメージネーション豊かに楽しむ境地まで高めたこと、など共通点も多いと思っています。

つまり、モーツァルトを愛するあなたがぼくに本居宣長を想起させたのですが、それもそのはず、宣長とあなたはともに小児科医（しかも同じ外科）という驚くべき共通性があったのです。

宣長が松田さんの師匠だったなんて、素敵なことではありませんか？

宣長は生涯松坂を離れず、開業医の傍ら淡々としかし想像力豊かに《源氏物語》を説き、あなたは生涯秋田を離れず時代がもたらす病根と闘い、多くの弱き人々を救い続けてきたのです。

こんなことだって、あなたにヒョイと話してみたかったし、あなたの反応をうかがいたかった。

それにしても、あなたは何につけても真剣勝負。

息を抜くことなく濃やかな人生を走られたようですね。

小児外科医としての活躍はもとより、ぼくが顰蹙をかってしまったタバコの社会悪への科学的な批判活動、さらには憲法九条擁護運動への取り組み、クリスチャンとしての献身的な教会への関わりやスポーツではバドミントンの選手

として全日本シニアに出場などなど犠牲的ともいえるその多様な活躍ぶりに圧倒されてしまいます。

あなたはきっと常人の何倍も濃密な時間をもった人だったのでしょ。

贈与とそれへの返礼の儀式、そう、ポトラッチの精神を想起させるあなたの人生の歩き方は、だからモーツァルトの生き方と重なってしまうのです。

そして、残されたのはあなたのこよなく愛したK540アダージョ・ロ短調。

なんと、儂く美しく染み入る調べでしょう。

松田さん、日本語で哀切よりもさらに深い悲しみの表現をご存知でしたか？

愁殺（しゅうさい）という言葉だ、と大好きな開高健が何かで語っておりました。

今年のサマーコンサートであなたと交わした一言二言を懐かしく想いおこしつつ、いまあらためて愁殺の一語がアダージョ・ロ短調にふさわしく感じられてなりません。

私にとっては、このアダージョ・ロ短調こそはト短調の弦楽五重奏（K516）にも比すべき孤高で愁殺なる一曲であり、松田淳のテーマ曲として深く刻んでいきたいと思っています。

松田さん、これからもアニバーサリーパーティーとサマーコンサートにはあなたが参加しているものと想って、あなたがそうであったようにたくさんの方のモーツァルトを楽しんでいくつもりです。

あなたが好きだった多くの仲間とともに。

だから、天空から松田さんも大いに楽しんでください、モーツァルトその人と一緒に。

では、あなたへのオマージュを綴った拙い詩を贈り、ペンを置きます……………』

ひとの死は必ずくる

人の死はいつも

早すぎるか遅すぎるかのどっちかだ

でも



本人を除いたすべてのひとにそれはくる
本人は生きていないことをしらない
死んでしまったひとに死は語れない

松田さん

モーツァルトをともに楽しんだ松田さん

モーツァルトをもっともっと語りたかった

そう思っていたら

向こうからあなたが手をあげてやってきた

いつものように愛想よくわらっていた

なんだ生きてるじゃん！

あのひとなつっこいまなざしがまぶしかった

わたしのなかの松田さん

このたび予告もなしに遠くまで引越したようなので

ひとまずは

「おかげさまで、ありがとう！」

そっとお見送りすることにします

そうだ

あなたの好きだった《アダージョ ロ短調》を

かけながら

ポリーニじゃなくて

ブレンデルのやつなんだけど

e n d

「モーツァルト広場」に出会うまで

会員番号 K519 加藤直子

私は現在の「モーツァルト広場」の会員の中で、最も新しい会員だと思います。今年の6月、友人と共に会員番号はK519リート「別れの歌」で入らせていただきました。

以前から「広場」の存在は知っておりましたが、気忙しい日々を追われ、入会のタイミングを逸してきておりました。今回投稿させていただいた拙文はその気忙しい日々を綴ったものです。

2004年春。6年半過ごしたアメリカから、夫の仕事でご縁が生じ、見るのも暮らすのも初めてな地・秋田へ、3人の子供を抱えて引越してきました。

引越しは何度やっても辛い。結婚してからは6度目。行き先がどこであろうとも、もはや新天地に期待も不安もないほど惰性的な気分になっていた。なんとか子供を幼稚園や学校へと送り出す。それ以外のことはできなくなっていた。ダンボールのガムテープを剥がす時は、ビリッという音で頭がクラクラするほどだったのを憶えている。

そんな状態だから、永いこと音楽は遥か遠くのものになっていた。

結婚して子供を産んでからは特に、より音のない世界が当たり前になっていた。私は子供の泣き声がダメだった。苦しくて、辛くて、怖くなって。子供といるから尚の事、音楽を聴こうなどとは思えなかったのかもしれない。

実家に残されているピアノもどれくらい触っていなかったらう。中学1年の時、私は好きだったはずのピアノをやめた。ピアノへの心残りや途中で投げ出してしまう半端者のような後ろめたさを引きずりながら、私はバスケットボールにはまっていた。バスケットにはまっ

たからピアノが離れていったのかもしれない。それまでいつもそばには音楽があった。思えばモーツァルトも。

そんな私が、自ら<音>を貪りたくなつたのは、アメリカで最初に暮らした街、テネシー州ナッシュビルで共に夫の留学という共通の事情から、同じく子供を抱え、子供の年齢も同じだったピアニスト・三宅由利子さんとの出逢いだった。

三宅さんの気さくな人柄に触れて惹かれ、無性に彼女のピアノが聴きたくなつた私は、その衝動のままを彼女に伝えた。

「ピアノが聴きたい」

彼女は軽やかに受けてくれた。

「いつでもどうぞ〜」

はやる気持ちを抑えることができず、子供を連れてでもいいという彼女の言葉に甘え、日曜日には賛美歌の伴奏をし、平日は自分の練習をしているという車で20分ほどにあるカトリック教会へ、私は嬉々として出掛けていった。

私は教会が好きだった。スタインウェイのグランドピアノが普通に置かれているその教会に足を踏み入れただけで、胸がいっぱい。当時2人だった子供は3歳と0歳。ひとりは手を引き、もうひとりは背中におぶって、上の子が走り回らないように、背中の子は泣き喚いて騒がないように、私は立ったまま聴いた。

彼女の奏でる確かな音色は、立って聴く私をゆらゆらと揺らした。込み上げるものは止められもはずもなく、溢れる涙を流れるままに呆然として聴き入った。永いことかかっていたこびりついてしまったコケも、なんとなくいつもどんよりとはびこっていたモヤモヤも、静かに消えていくようだった。私は聴いた。沁みるようなピアノの音色を聴き続けた。そこには日常を忘れ

三宅由利子のピアノに聴き惚れている自分がいた。

背中にいる子供の重さも忘れ、丸まっていた背筋をゆっくりと伸ばす。グシャグシャになっているはずの顔を上げ、私はスックと、未来を見るように前を見た。同じ場所に立ちながら私は、これまでとは違う私になっている気がしてならない。涙と共に、全てが浄化される気分だった。これほどスッキリとした気分になったのはいつ以来だろう。奏でられるピアノの音は、これまでの様々なリアルな情景をフラッシュバックさせた。こうして浸りながら、癒され、そして救われる自分を心の底から感じるのだった。



その後、我が家はコネティカット州に引越し、三宅さん家族は日本へ帰国することになり、しばしのお別れとなる。日本にいる彼女からは手紙と共にリサイタルを録音したCDが届いたり、親交は続いていた。アメリカでの生活は、思うほど楽ではない。彼女の生のピアノが聴きたいなあと思いながら4年が過ぎた。その間に

我が家には子供がひとり増え、更に雑多な日々を送ることになる。いつまでアメリカに暮らすのか、果たして日本に戻るのか、いつも私は不安の渦中にあった。体にもガタがきて、疲れもピークだったと思う。ほどなくして、夫は秋田での仕事が決まった。そしてなんと、ほぼ同時に、彼女の夫も秋田で仕事をするようになる。なんとという奇遇。驚くやら嬉しいやら。いつの間にか6年半にもなっていたアメリカでの思い出を胸に、我が家は秋田へと引越してきた。

秋田に移り住んでも私の日々の忙しさは変わらない。彼女の東京でのリサイタルも、ご案内にそむき出向くことは叶わずにいた。秋田での生活が1年半ほど過ぎた頃、彼女が秋田でリサイタルを開きたいと言ってきた。私は大喜び。二つ返事で準備を引き受けた。しかし、右も左もわからぬ秋田で、私は秋田を知らないばかりか音楽の専門でもない。会場はどこにあるのか、リサイタルなるものはどうやったらできるのか、そんなこともわからなかった。

でも、決めた。やることだけは決まった。鉛のように重くて動かなかった体も、スイッチが入ったように動き出す。自分でも不思議だった。行動あるのみ。動き出したら早くて笑った。会場を押さえ、日程も決めた。そしてしばらくして7000枚のチラシが手元に届く。そこで初めて、私は我に返った。

「このチラシを私は一体どこへ配ればいいのか…」

私は秋田の音楽関係者を誰ひとりとして知らない。誰がこのリサイタルに興味を持ってくれるのか。どこにこのチラシを配ればいいのか。チラシの束を前に途方に暮れる。そこからが本当のスタートだったように思う。気を取り直して考えた。考えながらも行動あるのみ。方々を駆けずり回っている内に、実に多くの方々をご紹介いただくことになる。

そのような中でご紹介いただいたおひとりに「モーツァルト広場」の加藤明さんがいらしたのだった。これが私の「モーツァルト広場」と

の出会いとなる。出会ってからは既に2年以上を経過していたが友人の誘いもあり、この度ようやく「広場」への入会が叶った。

「こんな素敵なコンサートがあるなんて」、と記念すべきコンサートとなったこの日、私は

友人と感慨深く語り合った。

類まれな集い、「モーツァルト広場」の会員の1人として、モーツァルトの響きをさらに楽しみ、より深く慈しんでいきたいと願っている。

映画のことなど

会員番号 K576 倉田直樹

1984年の封切り時に新宿・シネマスクエア東急で『アマデウス』を見た。18才だった。音響設備が整い収容人員が多い大きな劇場だった。満員だった。比較的観客の年齢層も高く、品もよく、場末の名画座でよく見かけた、疲労で押しつぶされるように眠りこけているサラリーマンなどいなかったと思う。しかし肝心の映画の印象はほとんど残っていない。俳優たちがみな無名だったせいもあるかもしれない。今思えば、上京した理由のほとんどが東京の名画座めぐりだったほど映画に熱中していたぼくにとっては少々奇異な感じがしないでもない。

映画マニアとしては監督が『カッコーの巣の上で』を撮った東欧からの亡命者だということが記憶に残った程度だった。映画の内容はからっきしだったが、当時の記憶として強烈に覚えているのは上映中ずっと空腹だったこと。何度も何度も腹が鳴ってほんとうに困った。それも画面にモーツァルトの楽曲が流れていない静かな場面に限ってゲー、とくるのだ。そのたびにひとり赤面しエンドマークが映し出されるのをひたすら祈っていた。だからモーツァルトが埋葬される場面に至っては（不謹慎だけど）心の底からほっとした。

『アマデウス』をもう一度見ようと思った理由はなんだったのだろう。はっきりとはしないがやはり映画つながりだったことと思う。ぼくは映画を見ながらそのもととなった脚本や戯曲

なども読みあさっていて、それで原作者のピーター・シェイファーに突き当たったのだろう。このひとは初期には軽いコメディを書いていたのが次第にぼつりぼつりと時々重厚な作品を発表するようになる。『アマデウス』以外では『五重奏（これはごく初期の家庭劇）』『エクウス』『ロイヤル・ハント・オブ・ザ・サン』等々。『エクウス』（劇団四季の上演があったが未見）は映画化され主演の精神科医を演じたりチャード・バートンがいい味を出していたように思う。『ロイヤル〜』は伊丹十三が翻訳者だった。『アマデウス』『エクウス』『ロイヤル〜』はどれも異なる題材だけど「神と人間の対立」というようなテーマでは一貫していて、もちろん日頃神様のことなど思いを巡らさないふつうの日本人には根本的に手の届かない領域だけど、ドラマそのものはみな力強いサスペンスに貫かれていてまったく退屈しない。哲学的なテーマをサスペンスの衣に包んでだれもが楽しめる娯楽作品に仕上げる、という手法は英米の優秀な劇作家によく見られるようだ。

『アマデウス』の初演時サリエリを演じたのはポール・スコフィールドというイギリスの舞台俳優で、劇そのものはもちろん彼の演技は高い評価を受けたらしい。日本での知名度は低いけれど口跡あざやかで素晴らしい「声」の持ち主だ。『わが命つきるとも』という史劇映画では主演のトマス・モアを演じ、またこのトマス・

モアは法律家でもあるので聴衆に弁舌をふるう場面がたくさんある。それがちょっと凄い。「言霊」という言葉があるけどまさにスコフィールドの台詞回しはそのものずばりで言葉の一つ一つが「生きて」いる（もちろん字幕を追いつながら必死に英語の意味を確かめるのだけど）。個人対個人の説得、個人対聴衆の演説、言葉は人間が生き抜くための大きな武器なのだということがよくわかる。

映画や演劇、とくに映画は俳優の立ち居振る舞いや画面、音楽などに関心が集中してしまう

けど俳優の台詞回しに注意を払うこともなかなかおもしろい。映画版『アマデウス』にもどると、やはり映画ならではの良さはある。終盤、病の床にいるモーツァルトとサリエリがふたりで「レクイエム」をつくりあげる場面は原作にはなく、断片的に音楽が挿入されてとても素晴らしい効果を上げている。けれど、もし俳優の「声」にこだわるならば、この映画のほんとうの独創はモーツァルトのあのけたたましい「笑い声」にあるような気がする。

酒とモツの日々 (21)

会員番号 K488 佐藤 滋

食品の偽装がやみません。産地偽装もひどいですが、それ以上に許されないのは賞味期限切れ、あるいは食に適さない食材等を用いた食品が次々と発覚していることです。

お酒で言えば米焼酎。食に適さない事故米を知らないで納品し製造したためにメーカーは大変な被害を被り、また風評被害で米焼酎業界全体に大きなダメージを受けたのです。愚生は焼酎のなかでは「米」が一番なじみやすいので、これは大きな事件でした。と同時に、九州の業者さんには申し訳ないのですが、米の国秋田の酒造業者さんたちが安易に焼酎製造に走らなかった見識に、安堵し一目置いた次第でした。

ところで音楽の分野、使い捨ての多いポップスと違って、伝統に生きるクラシック、特にオーケストラの世界での賞味期限でまず思い出すのが旧ソビエトのオーケストラでしょう。「ロシア」になってから来日するオケは、来る毎に洗練され、美しい響きを持つようになってきましたが、60年代の演奏は今思えば凄かった…。パーヴェル・コーガン指揮モスクワ国立響のチャイコフスキーは音程、バランス無視のミリタリーサウンド。楽器がひび割れるんじゃないかと

思うほどの大音量、というより咆哮、雄叫び。そして偽装といえば、コンスタンチン・イワノフ指揮ソビエト国立響によるチャイコフスキーの「序曲1812年」で、曲中にソビエト国歌がまんまと挿入されている…。今ではあり得ない笑い種ですが、最近笑えない演奏もありました。来日したサンクトペテルブルクフィル（旧レニングラードフィル）による「森の歌」（ショスタコーヴィチが、スターリン体制下で作曲したオーケストラと合唱の曲）です。



「森の歌」といえば私には旧ソビエト時代のウラノフ指揮モスクワフィルの思わず立ち上がってスクラムを組みたくなるような大時代的演奏が耳にこびりついていますが、現代超一流のロシアオケの演奏はどうだったかという、演奏そのものは純度の高い素晴らしい（指揮者テミルカノフはいい味だしてました）ものなのですが、ロシアでは断トツの明るいヨーロピアンサウンドが、体制翼賛の泥臭いロシア語とうまく合わないのです。（詩については、さすがにTVに字幕が出ないほどの社会主義礼賛、つまり賞味期限切れ、イデオロギー的には事故米、いや噴飯物）プロモーターの要請とはいえどんなに素晴らしいシェフ（料理長・指揮者）でも期限切れの材料では「通」を満足させるのは難しいでしょう。この曲はこの後どんな運命をたどるのか。政治に鈍感な日本でしか演奏されないのではないのでしょうか。それとも新左翼の深謀遠慮？

ところでモーツァルトに偽装はないでしょうか。極東の「ミチノク」でも気軽にモーツァルトを楽しめる時代になりましたが、高度な技術、あふれる情報、ひろがる世界市場のかげで見落とされているものはないのでしょうか。実際のと

ころ、モーツァルト自身がどんな演奏をしたか誰も知りません。食材があまりに素晴らしいので（しかも賞味期限無し）それぞれが自分の思いで解釈し、堪能しているにすぎません。やはり一度オーストリアに行って、その場所だけに息づいている当地限定のモーツァルトを尋ねる必要があるように思います。



事務局より

会報も20号を超え、毎回多くの会員の皆様より原稿をちょうだいし、またお読みいただいております。そして今回も初めてご寄稿いただいた会員様もおります。まだまだより多くの会員様のモーツァルト観を伺いたいと思っておりますので次回以降もお気軽に代表、もしくは

事務局までお問合せください。

今年も残すところ数日。暮れにむけてお忙しい毎日をご過ごされると思いますが、くれぐれにお体に気をつけて、また来年も「モーツァルト広場」の活動にご参加ください。

(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております（H20年7月現在126名）

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ・・・イヤタカ内

加藤 携帯電話 090(7939)4058 又は 本田（事務局）080(1673)8322